

米国の共済組合 - 連帯の家の歴史 -

Simon Cordery サイモン・コーデリイ(テキサス大学) 1995

米国の「連帯の家」と呼ばれる共済組合の誕生と発展と衰退の歴史に触れる。連帯の家は「ボランタリイの非営利組織で、その会員の福利を満たす組織である。連帯の家は共生と保障を行い、慈善的支援の性格が強いが、疾病給付、死亡給付、生命保険を運営した。会員の大多数は男で、儀式的な夜の集会を開き、職業別による集団であり、共同体の中で、特別な役割を果たしていた。

連帯の家は地域の保険的団体であり、多数の会員からなる小さな地方規模の組織が全国組織を構成していた。階層別で組織はされていないが、男だけで組織されていた。女性だけの組織もまれにあった。儀式と生活支援の混合が会員をひきつけた。非営利の福利組織として出発して、この連帯の家は、次第に会員のニーズを満たす組織となっていく。定期的な会費を徴収した。「それは一種の強制貯金であった。少ないながら利子が、さらに貯蓄にまわされたことが魅力であった」。

米国の連帯の家はイギリスの自由石工団体をまねしたものである。入会の儀式を行い、強制的な上下身分を適用した。連帯の家は、「能力優先」の考えと市民生活に基づいた取り組みを行った。すなわち、兄弟的な連帯に基づいた慈善的支援を行った。アメリカ建国の初期の時代には、自由石工団体は相互扶助を行って、地域においてネットワークを拡大した。アメリカ独立戦争の時代には、自由石工団体は政治的色彩を帯びた。初期のこれらの団体にとって「娯楽」も支援と同じくらい大事であったが、18世紀の終わりには連帯が「市民階級の宗教的・道徳的価値と結びついた」。

イギリスの「友愛組合」が米国に移植されたが、それが連帯の家である。最初の大きな連帯の家は「オッド・フェロウ」という名の共済組合で、バルチモア(1802)とニューヨーク(1806-1822)で発展した。1819年にイギリスからの移民で慈善家のトーマス・ワイルドリイが設立したが、当初は英国モデルの相互扶助組織を導入した。マンチェスターの共済組合の定款を採用した。独立的な組織となり、1825年には会員に飲酒を禁止した。そのため英国系のオッド・フェロウは脱落して、米国独自の自立型の共済組合としてのオッド・フェロウが誕生した。

「オッド・フェロウズ」が採用した道徳的基準は、フリーメーソンのモデルをなぞったものであった。支部の任務は病人の見舞い、貧困の軽減、「友愛的な他者への奉仕、配慮、道徳的規律」であった。米国における友愛運動は、150年の歴史がある。

オッド・フェロウズがフリーメーソンと違う点は2点ある。1840年に、オッド・フェロウは、「慈善ではなくて、権利として」の支援に転換した。したがって、保険は、いくつかの州では、あたらしい会員の加入をひきつける手段となった。友愛団(1868-1900)の黄金時代の直前に、オッド・フェロウ独立団は、「友愛の直接的利点」を主張し、1870年代に他の支部もこれになった。

オッド・フェロウズの第2の改革は、フリーメーソン方式ではなくイギリス方式で行われた。1864年に首都ワシントンで設立されたファタイアス騎士団は、この新しい方式を採用した。加入希望者は、地方支部に加入する。地方支部は全国支部(大支部と呼ばれる)によって統括されている。会員は支部長に選ばれた後に全国組織の役員に選ばれる。年2回定款の見直しなどのために集まる。

この組織位階制度は、急速に義務化されて、友愛、平等、公開の原則などで強化された。アルビン・シュミットは、1960年以降のいくつかの大支部の指導部のローテーションの分析をおこなった。それによれば、小さな組織では権限の地位に止まりがちである。これはまたロバート・ミッシェルの仮説とも一致する。すなわち、個人の小グループがしばしばボランタリイ組織の運営を独占してしまう。したがって、支部は民主的であろうとしているが、影響力のある地位に新しい人が来ることを排除しがちである。

フリーメーソンモデルは、アメリカ社会の人種差別を反映した。白人のフリーメーソンにたいして、黒人の同種組織もその中産階級の中だけで作られた。オッド・フェロウズもまた、黒人を排除していた。

北部と南部の自由黒人達は、イギリスモデルを元にして共済組合を設立した。これも2段階あった。第一段階は、アメリカ独立革命(1776年から1783年)にかけてであり、第二段階は黒人解放とそれに続く南北戦争(1861-1865年)後である。最初の黒人による共済組合は、フリーメーソン方式ではなく、1787年にフィラデルフィアの自由アフリカ人教会であった。1860年には、南部のカロライナ州のチャールストンの自由黒人の半分以上が2つの黒人共済組合に加入していた。

黒人共済組合の発展は南北戦争以降であった。奴隷制が廃止されて、アフリカ系アメリカ人達の新しい可能性が開けた。共済組合は、しばしば牧師によって小さな教区単位に作られ、教区の中でのみ力を得て発展した。19世紀の終わりに、「オッド・フェロウの大連合会は、組合員7万人となり、「プリンス・ホール」のフランス系共済組合は6万人の組合員であった。この時期、7万3千人の組合員が「真正改革者大連合会」に加入していたが、これはホテル、養老院、新聞、銀行、食料品店舗チェーンなどを経営していた。

アメリカ合衆国ができてから、他の民族たちにより共済組合が作られた。中央ヨーロッパや東洋からの移民が増大して、反対に土着主義(反移民運動)が盛んになり、共済組合運動も西ヨーロッパというつながりで強化された。ユダヤ人移民は「ランドマンシャフト」という共済組合を作り、「古い王国」としての社会的文化的つながりを保持した。200万人以上のユダヤ人が1800年から1923年にかけて米国に移民してきた。その半分は、ニューヨークの「ランドマンシャフト」に加入していた。同様に、ポーランド人、ハンガリー人、スロバキア人なども、自分たちの友愛組織を通じて疾病保険、死亡保険の契約をした。

1900年頃に、アングロサクソンの文化帝国主義に真っ向から反対して、ヒスパニック系や南アメリカ人たちの間で友愛組織が発展した。これらの組織は「ロスベニテンテス」と言う名前の16世紀の宗派で貸付を行い葬式をおこなった組織の名前をとったものである。ロスベニテンテスは1861年に、ニューメキシコの「タオ純正友愛組織」の設立に始まる。テキサスのスペイン系の人々は「アメリカの息子団」を1921年に設立した。これは自分たちの政治的権利を守るためのものであったし、免税や納税の手助けをするものであった。すこし遅れて、「ラテンアメリカ市民連盟」が不十分ながら設立された。これは現在まで続いている。

全国的な友愛組織は、民族的な差別はなかったが、女性差別は大いにあった。友愛組織は、男文化であった。男性の間の兄弟愛と連帯によって男性意識を促進する共同意識であった。女性を排除したために、友愛組織は男の労働と余暇を「分離した空間」となった。アメリカ社会研究者のM.C.カーズは、友愛組織の主要な特徴は、母性支配を埋め合わせるに足る父子関係的な宗教儀式を行うことにあると述べている。夜の集会において、会員は男らしさを取り戻すのである。

共済組合はあらゆる社会階層を含んでいた。フリーメーソンの組織は、「金持ちやひとかどの人物たち」によって構成された。これらの人々としてカトリックや移民はしばしば除外された。1880年から1930年にかけて、カリフォルニアのフリーメーソンの共済組合支部で占める労働者階級は17.5%から25.5%に増加した。1909年には、50%以上になった。他の研究によると、友愛組織は階層差別するよりも混合を促進したと述べている。たとえば、カンサスシターのオッド・フェロウズ共済組合は、労働者階級と中産階級が半々であった。ミズリイ州の同共済組合では、1874年から1912年にかけて、労働者階級に属する組合員は38.6%の比率を占めた。

共済組合は労働者と雇用主が個人的に接触することにより階級意識が弱くなっていった。また逆に政治的な妥協が推進され、宗教儀式に基づいた理想化された社会的序列意識が作られた。その閉じられた中での地位の上昇があった。しかし、この理想的な考えはしばしば、地域の社会経済的な実態を反映したものであったので、指導者はたいていは中産階級の者で

あった。ニューヨーク州のオルバーニーには、1840年から1850年にかけて、商業従事者たちが共済組合の指導部を占めていた。それは組合員の大部分が職人たちであったからである。中産階級は友愛組織を好み、紛争を嫌った。「パイシャス騎士団」は「生活のぎすぎすした面を和らげること、調和的な友愛で結ばれたあらゆる階層の、違いを超えて集まった男たちの組織」だとしている。

友愛原理は、儀式的な共感と社会保証の結合に基づいている。生活防衛の側面として友愛組織は、南北戦争以後最盛期を迎え、1868年以降、「連合労働者伝統団」(AOUW)を設立した。白人男性と専門職を集めて、保険業務をより安い料金ですすめ、AOUWは徐々に友愛団の性格を改良していった。

AOUWは、「当時の労働運動の特殊な保守的な一派」とみなされていたが、労働組合の変種と自分たちは考えていた。1869年に、AOUWは、保険業務を開始したが、これは他から長く真似された。各組合員からの保険料は、死亡時や疾病時に配当された。19世紀の終わりに、年齢に応じた保険料払込は、一般保険料にとって代わった。

当時AOUWは米国で第5番目の友愛組織で、43万5千人の組合員がいた。多くの類似組織があった。1880年までには78の友愛組織があったし、1880年から1901年に掛けては490の友愛組織が設立された。

これらの組織は、商業保険会社も安い保険料で、1870年代における必要不可欠なものになった。当時は景気後退の時期であり、多くの保険会社が倒産したり、汚職が露見したり、経営が失敗したり、無駄遣いしたりして、人々の信頼を失わせた。友愛組織は、もともと人々の個人的献身に基づいて機能するものであるので、保険料が減少することは弱体化不安定化につながった。さらに、友愛組織は慈善を促進するものであった。1873年の経済危機に際しては援助を盛んに行った。

民間保険会社との競争では、一定の成果を納めて業界の中で友愛原理を示すとともに逆にその友愛原理の本質に対する挑戦も受けた。1853年以降、「オッド・フェロウ」共済組合の定款では、組合員は疾病保険や死亡保険に関心を示すものの、それが「われわれの主要目的ではない」としている。1880年代になって移民を対象にした共済組合たちもおなじ問題に直面した。創設者たちは、組合員は保険に対する関心を強めていたのに民族的問題を含んだ政策を立てた。経営が盛んになるにつれて、報酬、投資政策の議論が支部の夜の集会よりも大事になってきた。つまり商業的側面が重視されるようになった。

逆説的だが、支部の友愛的関係が支部の存続を危うくしだした。組合員が高齢化するにつれて保険料も固定化し始めた。したがって多くの支部では給付金を支払うことが困難になり、さらに競争は保険料の値上げを難しくした。おびただしい失敗事例が生まれたので、收拾のために全米友愛会議(NFCA)が改革をおこなった。友愛組織は保険料の値上げを行い、積立金を増やして破産をさせた。しかし、この改革自体は友愛組織の崩壊を促進した。というのも友愛組織の保険料金は民間競争相手のそれよりも高かったからである。

友愛運動は1920年代に弱体化して来た。当時、友愛組織が行っていた生命保険契約の比率は50%から33%に下降した。伝統的手工業が衰退して大量生産にとって代わって、相互主義は終焉を迎えた。共済組合は私生児のようになって、マスメディアやスポーツ組織が代わりに現れて、最後にはキワニスやロータリイクラブのようなエリート組織が発展した。

1929年の経済危機は共済組合の大衆化に悪影響を及ぼした。それは今日まで続いている。1930年代に、友愛運動は、37万8千人の組合員を失った。小規模家計にとっては共済組合はもはや有利ではなくなってしまった。1930年から1949年にかけて、フランス系のフリーメーソンは約4分の1の組合員を失った。他の共済組合は財政安定に努力した。1958年の共済ボランティア組織についての調査では、加入者の数は減少していないが、労働者の関心は次第に減少しており、19世紀末の数字に比べて複数組織への同時加入者の数は対照的に減少している。NFCAの加入者数については、友愛保険組織の加入者は、過去30年で著しく減少している。1961年から1990年にかけて、友愛組織の数は3.8%減である(1961年の103から1990年の99に)、また支部も38.9%減(6

9, 842から42, 699に)である。

米国における共済組合と州や国家との関係は、市民社会と政治との関係と同じく完全に区別されている。連邦政府は決して共済組合に直接的な関与はしない。民間保険会社に対するように、友愛保険会社は各州の規制に任せている。連邦政府は共済組合支部に対する特別法は作らない。民法で規定するだけである。ワシントンでは、いずれの機関も友愛組織の統計をとっていないし、また所管していない。すなわち、米国においてはイギリスにおける友愛(共済)組合(フレンドリイソサイエティ)に該当する法律が存在しない。

政府が関与しないために、友愛組織は独立しており、自由が保障されていると言える。南北戦争以後、友愛組織には特別法がなかった。友愛組織は、組合員にたいして自らの組織が社会的な優れた組織であることを確信させて忠誠を勝ち取った。一部の友愛組織では、社会主義的な考えが広まった。多くの組織では「立派な」中産階級の価値観が広められた。

各州政府は、友愛保険の規則化を行った。しかし、多くの友愛組織は定款を重視して、財政不安定の時期を乗り切った。1888年にNFCAが提案した法案が1917年になって、財政管理条項を明記して8州で採択された。全米保険審査員会議の年次総会で準備された重要法案である「モービル法」は、1910年にアラバマ州のモービルで作られたものであるが、共済組合の財政安定のために、保険料率をあげて、貯蓄金庫を作れることを定めた。1917年に、この法律は13州で採用された。今日、多くの州で友愛組織についての法律が作られている。法律では加入年齢制限、給付資格、年齢別給付最高制限、代理店の免許資格などを規定している。

友愛組織のこの分野に関する研究はいくつかある。共済組合は民主主義に基づいて、個人主義に反対して共同的努力をしている。一部の研究者は共済組合が統合よりも混乱を持ち込むものだとして評価している。M. A. クローソンはヨーロッパの共済組合とアメリカの共済組合の類似性を強調している。しかし、友愛組織の欧米比較は存在していないと残念がっている。共済組合の在り方は表面的な経験論的な一般論が多い。様々なコミュニティにおける共済組合に関するまじめな研究が行われるならば、州と市民生活との相互関係がより明確になるだろう。共済組合と地域市民生活との比較は、また友愛組織と労働組合の内部関係、誰が権力を持っているのかということをも示す。共済組合の歴史から出てくる問題に答えるためには、米国の社会および政治についての分析が重要である。

以上